

# 京都大学人文科学研究所国際研究ミーティング実施報告書

## 1. 国際研究ミーティングの名称

Things, Organism, and Environment: East Asian Biological Technologies

## 2. 主宰責任者氏名

河村賢（大阪経済大学講師）

## 3. 開催日時等およびプログラム（講演者名または報告者名を明記してください）

日時:2024年11月9日（土）

場所:京都大学人文科学研究所本館4階大会議室（ハイブリッド開催）

プログラム:

Opening Remarks

Seulgi Lee (KAIST, Graduate Student)

Making unruly ocean smart: smart aquaculture projects in South Korea

Soto Tsuruta (Osaka University, Specially Appointed Fellow)

The Birth of "Weeds"? An Attempt at a History of Beings and a Concept

Kjell Ericson (Kyoto University, Senior Lecturer)

Defining "Clean Seas" between the United States and Japan: The Transpacific Politics of Shellfish Sanitation in Post-1945 Hiroshima Bay

Akihisa Setoguchi (Kyoto University, Associate Professor)

Sweeping Net: History of Body Practices in Insect Collecting

Jung Lee (Ewha Womans University, Assistant Professor)

Resourceful Creativity, or 機智: socioecological evolution of papermaking with tak in late Chosŏn

General discussion

## 4. 概要(400字程度)

本ワークショップでは、東アジアにおける生命科学、科学技術を対象とし、モノと生物がつくる環境に注目した研究について報告・議論が行われた。Seulgi Lee (KAIST大学院生)は韓国におけるスマート水産養殖について報告した。Kjell Ericson (文学研究科特定講師)は、広島における牡蠣養殖の展開と日米関係について論じた。両者は、これまであまり注目されてこなかったモノに注目した水産養殖技術史を考えるための視座を提供した。鶴田想人 (大阪大学特任研究員)は、ヨーロッパにおける「雑草」概念の展開について、中世の薬物学から近代日本までをたどった。瀬戸口明久 (人文研)は、捕虫網の歴史から昆虫採集の展開を検討した。ここでは生物と人間の関係が、モノを媒介として変容してきたことが注目された。最後にJung Lee (梨花女子大学助教)は、朝鮮王朝期における製紙技術を題材に「機智 (resourceful creativity)」を鍵として技術を考える視点を提示した。これらの報告から、単純な発展史観ではない、人間と人工物、生物の相互作用から科学技術を考える視点が共有された。

## 5. 参加者(別紙「参加状況」も記載してください。)

学外

河村賢(大阪経済大学講師)、Seulgi Lee(韓国科学技術院大学院生)、Jung Lee(梨花女子大学助教)、鶴田想人(大阪大学特任研究員)、標葉隆馬(大阪大学准教授)、森下翔(山梨県立大学特任助教)、飯田香穂里(総合研究大学院大学准教授、オンライン参加)、中尾麻伊香(広島大学准教授、オンライン参加)

学内

Kjell Ericson(文学研究科特定講師)

久保田唯史(iPS 細胞研究所特定研究員、オンライン参加)

所内

瀬戸口明久、岡澤康浩

6. 助成金の使途等

申請書の通り

7. その他(成果や今後の展開等、自由に記載してください)

少人数ではあったが、若手研究者を中心とした交流を深めることができた。次年度以降も関連する研究班などで、共通するテーマにより大規模な国際シンポジウムを企画することを予定している。

## 参加状況

区分	機関数	参加人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	40歳未満	35歳以下	大学院生	総計	海外研究者	40歳未満	35歳以下	大学院生
人文研所属 (下段:女性数)	1	2		1			2		1		
京大内(人文研を除く) (下段:女性数)	2	2	1	1			2	1	1		
国立大学 (下段:女性数)	3	4		1			4		1		
公立大学 (下段:女性数)	1	1		1			1		1		
私立大学 (下段:女性数)	1	1		1			1		1		
大学共同利用機関法人 (下段:女性数)											
独立行政法人等公的研究機関 (下段:女性数)											
民間機関 (下段:女性数)											
外国機関 (下段:女性数)	2	2	2		1	1	2	2		1	1
その他 (下段:女性数)		2	2		1	1	2	2		1	1
計	10	12	3	5	1	1	12	3	5	1	1
		4	2		1	1	4	2		1	1

## 【その他の参加状況】

※「その他」の区分受入がある場合、具体的な所属等名称を記載

例) 高校教員

無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要

※若手の研究者が何人参加したかを把握するためのものとなりますので、わかる範囲で記入してください。

※受入人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出してください。

(例) 国際研究ミーティングに参加者2人が3回参加した：受入人数2人、延べ人数6人

※海外研究者、若手研究者(40歳未満)、若手研究者(35歳以下)について

海外研究者…本務所属が海外の研究機関である研究者を記入してください

40歳未満…「35歳以下」「大学院生」を含む「40歳未満」を記入してください

35歳以下…「大学院生」を含む「35歳以下」を記入してください

(例) 35歳の海外研究者の場合 →「海外研究者」1人、「35歳以下」1人

33歳の研究者の場合 →「40歳未満」1人、「35歳以下」1人

※受入人数、延べ人数については上段に総数を、下段(黄色枠)に女性の内数を記入してください。

※「京大内」の所属機関数は「学部数」等を記入してください。